

## 学会創立五〇周年に寄せて

黒沢文貴

軍事史学会は昨二〇一五（平成二十七）年に、創立五〇周年を無事に迎えることができました。これも会員のみなさまのご支援、ご協力があつたればこそですが、さらに広くは学会内外からのご理解の賜物とも思っております。ここにあらためまして厚くお礼申し上げます。

軍事史学会は戦後日本の復興の象徴であつた東京オリピック開催の翌一九六五（昭和四十）年に、軍事史に関する学術的研究をおこなうことを目的として設立されました。戦後も二〇年を経過し、日本も高度経済成長の発展を遂げるなかでの設立ではありましたが、軍事史という学術分野そのものは、他の学術分野に比してその後も長らく困難な環境にありました。なによりも軍事史研究そのものが、ある種批判の対象でありましたし、それを

研究する者に対しても懐疑的な眼差しが向けられるという雰囲気もありました。そうした意識の底流には、「軍事」を「平和」や「民主主義」の対極にあるものとして位置づけるという理解の仕方もあつたかと思えます。

しかし、軍事史学会員をはじめとする、これまでに軍事史研究に携わってきた多くの方々のご努力の結果、今日ではそうした学会をとりまく環境も大きく変化してきました。軍事史が学術分野のひとつとしてようやく認知されてきましたし、さらに近年、特集号形式を軸に幅広い内容を盛り込んでいる機関誌『軍事史学』が、各方面から好評を博していることは周知のとおりです。

昨年には、学会誌の五〇周年記念として『第一次世界大戦とその影響』を単行本（『軍事史学』第五十巻第三・四

合併号)として出版しましたが、そこには英独仏露中など海外の第一線で活躍されている多くの研究者の論考を収めることができました。また昨年八月に「総力戦と冷戦」をテーマとする国際シンポジウムを、創立五〇周年記念大会にあわせて開催しましたが、そこにも英米韓の著名な研究者をお招きすることができました(内容については、本号参照)。もちろん本学会はこれまでも国際軍事史学会の有力な加盟メンバーであり、理事も輩出してきましたが、前記のように学会活動がさらに国際化していることも、学会をとりまく近年の傾向としてまことに喜ばしいことです。

ところで、軍事史と聞くと、すぐに戦艦や戦闘機や戦車、あるいは弓、槍、鉄砲、甲冑、城郭などを思い浮かべ、作戦戦闘史や合戦史などをイメージされる一般の方も依然として多いかと思えます。それらの研究対象は、もちろん軍事史研究の重要な分野であります。しかし軍事史に含まれる研究範囲は、けっしてそれにとどまるものではありません。たとえば軍事が、政治・外交(国際関係)・経済などと密接な関係にあることはいうまでもありませんが、他にも文化・思想・教育・科学・法な

ども当然のことながら関係してきます。

また戦争が人間の営みである以上、さらには戦争の形態や規模等が変化することにより、戦争という主題には、指導者論やリーダーシップ論、国民動員や宣伝・広報、情報戦、占領地行政、捕虜問題、そして軍人や国民をとりにまく衣食住、医療・衛生、勲章・恩給、慰霊・追悼など挙げはじめたら切りのない、いわば人間活動にかかわるきわめて多くの要素が、そこに集約されてきます。今日的な研究視点でいえば、女性史やジェンダー、ジェノサイド、人道・人権、戦争の記憶、そして戦争責任、賠償、歴史認識、和解などという問題とも関係してきます。

さらに時間軸で考えれば、戦争は古代から近現代にまでわたる事象ですし、ひとつの戦争・武力紛争をとつても、その戦前・戦中・戦後(軍隊でいえば、動員・戦闘・復員・論功行賞・慰霊追悼などという一連の時間の流れとしてとらえることができます。また戦後史という視点からいえば、少なくとも昭和の終焉もしくは冷戦の終結頃までは、軍事史の研究対象の範囲として取りあげることが可能です。

他方、空間的にはいうまでもなく、戦争は古今東西で

繰り広げられてきたグローバルなものです。

それゆえ戦争・武力紛争、さらには平和を維持しようとする営為は人類誕生以来の、そして地球上のいたるところでみられた人間的な営みといっても過言ではないでしょう。

いずれにせよ、軍事とそれに関係する多種多様な要素、そして戦争・武力紛争・平和という事象を主たる研究対象とする軍事史は、このように広義に考えれば、歴史的視点を前提としながらも、かなりの広がりとお興行きをもつ学術分野であるといえます。近年『軍事史学』がさまざまな特集テーマに取り組んできた前提には、そうした理解があるわけです。

しかし一方では、軍事史本来の持ち味である作戦戦闘史の重要性も、その価値を減じているわけではありません。日本近代史の分野に限ってみても、たとえば日中戦争や太平洋戦争におけるより詳細な戦闘の実相や死傷者数などについて、歴史的事実としてあらためて研究を精緻化していかなければならない点があるかと思えます。そしてその点からいえば、近年、作戦戦闘史の実証研究に取り組み研究者があまりみられなくなってきたことは、

軍事史としては危惧すべきことではないかと思われ、作戦戦闘史、戦史の研究のさらなる進展が今後望まれるところです。

以上、長々と申しあげましたが、今後とも軍事史学会は、軍事史の特性を意識しながら、学術活動に取り組んでいきたいと思っております。そしてそのためには、日本近代史に偏りがちな学会員の専門分野の構成を、少しでも拡げていく必要があります。具体的には、外国史に関心をおもちの方、古代・中世・近世など前近代史に興味をもたれている方、そして女性や若手の研究者のさらなる入会と学会活動、『軍事史学』への投稿が求められます。

軍事史学会の今後の発展のためには、なによりもそうした研究テーマの広がりとお多様な専門分野をもつ会員の増加、次世代への学術成果の継承が必要不可欠であり、今後その実現に向けたたゆまぬ努力が必要です。本学会は学術研究団体として、軍事史分野の知の継承に今後もお貢献し続けていきたいと思っております。また、それを担う学会であり続けたいと思っております。

(会長)